結論（F. Landa Jocano）

佐々木　靖（訳）

目次

第 3 部　結論

13　共有する様式

（社会的枠組み／家族組織／*Barkada*（仲間集団）／社会化の慣習／基本的な文化的主題／まとめ）

14　基本的な仮説

（仮説／まとめ）

いかなる研究でも、最終的に研究者は読者に研究してきた事柄のある種の全体的な像、即ち結果を提供することが期待される。民族誌的データを吟味してきた後に、フィリピン人社会組織に関して発見したものは何か。フィリピン人社会に関して確実に一般化できるものから得られる、一般的に共有される様式はあるのか。フィリピン人の社会と文化を語ることは可能なのか。

第 3 部ではこうした疑問を扱う。ここでは、この国の知識の本質的な要素とフィリピン文化を構成する、一般的に共有されている信仰と習慣のいくつかに焦点をあてる。

13　共有する様式

先に述べたように、フィリピン人社会は均質な体系ではないが故に、社会組織を一般化することは危険であると批評家は警告してきた。この国はばらばらの島々に分かれており、このことは同質性よりも異質性の多いことの説明になると批評家は言う。民族誌的データを検討してみてこの警告には根拠がないことが分

かった。この主張はフィリピン人の特徴についての誇張された固定観念に基づいている。

全てのフィリピン人民族集団に共通する、地域生活の構造と組織には基本的な特徴がいくつかある。この特徴は、その民族集団がイロカノであれカパンパンガン、タガログ、ビコラノ、ワライ（レイテ－サマール）、セブアノ、イロンゴ、パンガシナン、タウサグ、マラナウ、マギンダナオであれ、大多数のフィリピン人に付随したものでもある。この共通する特徴のうちで最も顕著なものは、人と人との関係、社会化の慣例、それに文化の主題の社会的枠組みである。次の図でこれを示す。

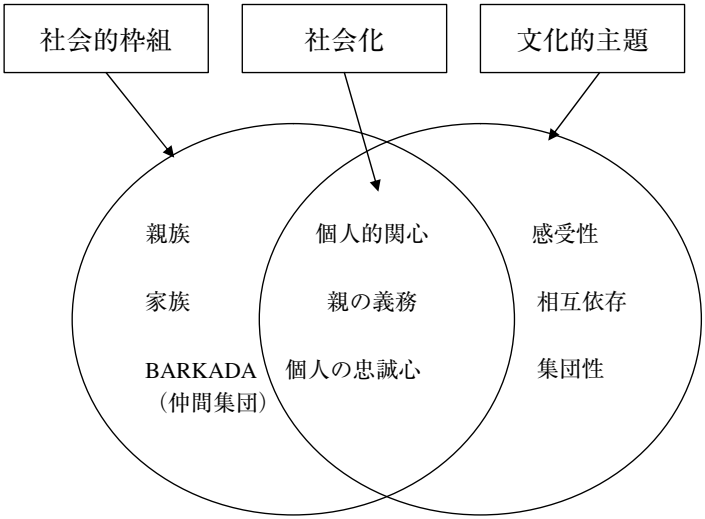

図４．一般化されたフィリピン人社会組織の基本的で共有された枠組みを示す例図

社会的枠組み

全ての民族集団のその地域における組織の社会的枠組みは同一である。この枠組みの最も重要な単位は親族、家族、*barkada*（仲間）である。

親族構造

フィリピン人の親族構造は技術的には父母両系と記述されてきた。地域社会の他の成員との親族関係を辿ってみれば父親側・母親側双方の親戚が平等に扱われており、どちら側にも目だった差異がないことが確認された。ある場合は、母親側の親戚が父親側の親戚よりも自己に近いし、その逆もある。しかしこれは、社会システムの組織原理というよりも個人的な選択あるいは住居の地理的な距離によるものである。

フィリピン人の親族は、父母両系構造とは別に世代的に階層化している。各世代は他の世代とは区分されて認識される。いくつかの単系体系に見られるような世代間の融合はない。さらにこの体系は年齢階層的である。年齢は知恵と経験と同等に見なされる。年功は生物学的あるいは世代的年齢の観点で定義される。年長者には高い身分が与えられ、必然的な尊敬が授けられる。若者が高齢者の助言を求めることは一般的である。厳粛な決断が求められるような状況では特にそうである。

さらには、一族や半族などの重要な家系集団といったものは実際上存在しない。いとこの術語においては、指示的用法においても呼びかけにおいても（人類学の文献における）古典的なハワイ型とエスキモー型を効果的に兼ね備えている。家系は共通の祖先には溯らず両親の大勢の祖先に溯る。

家族組織

フィリピン人は家族を社会組織の基礎的な要素と見る。この見方は全ての民族集団に共有されている。これはフィリピン人の考え方、信仰、感情、行為の中心である。理想的には、家族は父親と母親、および親の家であるいは離れて暮らす子ども（たち）から成りたっている。

実際上家族は生活のほとんどあらゆる物の源泉であると考えられている。家族は、特に危機的な時や老後の保障においては、経済的な援助、社会的な地位、宗教上の手本、心理的な支援の源泉である。

家族がその成員に与える影響の浸透性は強調してもしすぎることはない。あるフィリピン人にとって家族は唯一の世界である。親は子どもの職業や結婚相手、

住居の場所の選択にある意味で遠慮なく介入する。同様に子どもは重要な決定に当たって親の助言を求めるように期待される。数は少ないが例外も認められる。しかし、これらはほとんどが都市中心部においてである。

***Barkada*（仲間集団）**

フィリピン人の社会集団において 3 番目に重要な単位は *barkada*（遊び仲間、仲間集団）である。時に *samahan* という用語も用いられる。いずれの用語が用いられてもこの単位は、労働者として、共に旅をする、ただ単に一緒にいるなどのある特定の目的のもとに集う人々の集団でできている。*Barkada* は緩やかに組織される。構成員は永続的ではない。成員は遊び仲間であったり、職業上の同僚であったり、宗教や市民運動の同僚であったりする。*Barkada* の構造は緩やかであるが、組織は重要である。家族以外で、心理的なあるいは経済的な支援を得られるのがこの単位である。例えば、特に職業上の組織においては、*barkada* に受け入れられることは昇進やビジネス拡大において必要なことであると考えられている。危機的な時には *barkada*（遊び仲間、同僚）が助けにやって来て心情的な支援を提供する。これによって仲間の繋がりが強められる。

社会化の慣習

フィリピン列島の全ての民族集団は同一の社会化の慣習を共有する。南部フィリピンのイスラム教徒に見られるように、いくつかの民族集団の間には宗教の理由により一般的な類型に若干の修正が見られる。しかしながら、全体的に見れば社会化は、子どもたちに共通に共有された思考方法、信仰、感情、行動、を発達させるある慣習にはっきりと現れる。これがフィリピン人であると認識させるものである。

Andukha（個人化された世話）

社会化に最も近いフィリピン語の用語は *andukha* である。これは、「思いやりを持って世話し、育て、保護し、養育すること」を意味する。時には、*aruga* か *pag-aaruga*（思いやりのある世話）という用語も用いられる。この概念から出て

くる社会化の慣習は極めて個人的なものである。それは子ども中心である。生後数か月でフィリピン人の子どもは、数多くの文化的に条件付けられた行動様式にさらされる。子どもは決して一人で取り残されることはない。子どもは絶えず抱きしめられ、話しかけられ、触られ、食べ物を与えられる。母親が働いている時には、年上のきょうだいや女性のお手伝いと共にいる。

継続的な抱擁と世話は子どもに、成人した後にフィリピン人の感受性と表現されるものの説明となるとても深い感性を発達させる。フィリピン人は温かい国民である。フィリピン人は誰に対しても、それが親しい友人であれ、初めて出会う人であれすぐに微笑みかける。フィリピン人のもてなしの心（ホスピタリティー）はこの早い段階の社会化まで溯ることができる。

まさにこの個人的な子どもの世話がフィリピン人間の対人空間の狭さをも説明する。フィリピン人は話し合う時には近寄る傾向がある。それは腕の長さよりも短い。会話は身体に触れ、（*kalabit*）手を握ることに特徴がある。公共交通機関であっても自分の住まいであっても、込み合うことで困ることはない。それが人間らしく可能であるならば、誰もが受け入れられる。もし助けの手を差し出さなければ、*walang pakialam*（気遣いがない）や *walang awa*（思いやりがない）と眉をひそめられる。

子どもの世話に関して、その躾に超自然的存在が積極的に関わるという信仰がある。悪霊から幼児を守るために意図された入り組んだ儀式が、特に子どもが病気の時には、個人的に行われたり公開で挙行されたりする。

こうした信仰や儀式は、民族の出自に無関係に全てのフィリピン人に共有されている。この一連の信仰を表わす用語は言語学的に異なるかもしれないが、この信仰が支持され実行されるそのし方は同じである。

Pananagutan（義務）

子どもが人生における基本的な価値、即ち *pananagutan*（義務）を学ぶのはこうした密接な子どもへの世話の営みを通してである。この責務は家族にあると見られる。家族外では、*pananagutan* は明確ではない。これは、活動が重要な親族集団と共に行われるとき以外は地域中心ではない。都市部においては近所の遊び

仲間が親族集団の代わりをしてきた。しかし、その作用原理は同じである。いずれにせよ、子どもは第１の義務が自分の家族にあることを、絶えず気づかせられる。つまり、家族の食い扶持に貢献できるようになるとすぐにそうし、いつでも家族の利益を守るように気づかせられる。親に何かがあった場合は、一番年長の子どもが代理の保護者の役割を果たし年少のきょうだいの世話をする。

Pagkamatapat（忠誠）

この概念は *tapat*（誠実な）あるいは *katapatan*（正直、誠実、潔白、高潔）という語に由来している。*Pananagutan* と並んで、家族と親族に対する個人的な忠誠は勧められるだけではなく実際に要求される。この道徳上の要求は、心情的、金銭的、法律的など様々な形の支援をも含んでいる。きょうだいや親戚に金銭援助をして入学させることを申し出たり、もし適当な地位にいれば親戚のビジネスのために仲介したり、必要であれば仲立ちの役割を果たしたりする。

忠誠は一方通行ではない。これはもう一つの価値である助け合いに連結している。ある者が必要とする時に助けられれば、その恩人が必要な時には同様に助けることが期待される。この道徳的な規範に背くと、多くの口論、陰口、喧嘩につながる。もしこれが食い止められなければ、結局は親族関係の破綻へとつながる。

基本的な文化的主題

すべての民族集団が共通に共有する基本的な文化的主題が存在する。それは、*pagkamaramdamin*（感受性）であり、*katugunan*（相互依存）であり、*kabuuan*（集団性）である。

pagkamaramdamin（感受性）

フィリピン社会の研究者によって繰り返し観察されるようにフィリピン人は感受性が鋭い。彼らは涙もろくすぐ笑う。また、怒りやすく激情が静まるのもはやい。声を荒げられたり真っ直ぐ凝視されたりすると侮辱されたと感じる。

この感受性はフィリピン人が感情（*damdamin*）を高く尊重していることを反

映している。フィリピン人は感情に関心の中心がある民族である。この敏感すぎる傾向は *hiya* の概念に具現する。*Hiya* は *mukha*（顔）と密接な関係がある。顔（面目）を失うことは大いなる落胆である。場合によっては致命的なものとなりうる。

感受性が鋭いということは、彼らがイロカノ人であれパンガシナン、カパンパガン、タガログ、ビコラノ、ワライ、セブアノ、イロンゴ、タウスグ、マラナオ、マギンダナオ人であれ、すべてのフィリピン人に共有された行動類型である。

katugunan（相互依存）

相互依存は、フィリピン人文化が民族の境界を超越するもう一つの主題である。これはイロイロやセブ、ビコール、レイテ－サマールでは *balaslanoy* と呼ばれている。これはお互いに対する期待を本質的な部分としている。親切な行為は常に報われる。相互依存の倫理的道徳的意味は *utang-na-loob*（感謝の念の感覚）という概念に最もよく表わされる。親切な行為や贈り物は相互に期待される。取るに足りない個人間のあるいは集団間の関係でさえも相互的であらねばならない。

kabuuan（集団性）

フィリピン人の同質性をよく説明するもう一つの文化的主題は *kabuuan*（集団性）という概念である。フィリピン人社会は個人主義者の社会ではない。*Makasarili*（個人主義者）である人物は敬遠される。フィリピン人は個人中心主義ではなく、集団中心主義である。これは一般的には、重要な問題においては賞賛すべきこととは言えない。フィリピン人の関心事は「kung ano ang sasabihin ng mga tao（私たちがすることやしてしまったことについて人々はどう言うか）」である。個人に起こることはすべてその人の（a）buong mag-anak（家族全員）、（b）buong kamag-anak（直接の親族全員）、（c）buong angkan （親族集団全員）に影響を与える。

集団的志向や行動は、しばしば小集団（家族や親族集団）に関係のある活動に集中する。親族から成る環境で成長していくあいだ、子どもは常に仲間でもある親戚と仲良くすることを求められる。

集団性あるいは集団から孤立することは他者の激怒を招くことになる。*Makasarili*（個人主義者）として知られる者はしたがって集団に受け入れられない。*Barkada*（仲間集団）に属する者はときに *kabaro natin*（同じ立場、例えば同じ制服を着る）、*katribo natin*（同族の成員）、*hindi natin katalo*（我々に敵対していない）などのように比喩される。この文脈における集団行動は *barkada* のすべての成員により集団的に共有される。

まとめ

ここまでは、民族言語的出自に関わることなくフィリピンの地域生活に付随する信仰や慣習と同様に、フィリピン人の親族と家族組織に一般的に共有されている主要な特徴を際立たせてきた。これらの情報を基にすれば、基本的な慣習・制度や文化類型の構造においては差異よりも類似点が多く存在すると言わざるを得ない。これによってフィリピン人の社会組織についての一定の一般法則化が可能となるのである。

14　基本的な仮説

ここで、フィリピン人社会における親族および非親族に関するいくつかの仮説を導き出すことは、本研究にとって有益なことである。記述的研究における予測を議論するうえで分析評価の基準として仮説を利用することは任意である。人々が、その文化における物事の性質やこうしたことが社会組織の中でいかに統合されることになるかについて述べたり憶測したりすることは仮説による。

この見方は、文化は人々が物事を考えたり、信じたり、感じたり、行ったりするそのし方に影響を与えるという考え方に基づいている。また、これは行為の可能性、特に選択や優先に関係する分野においては、範囲を決め限界を規定する。

社会的行為の整合性と予測性を測る手段としてこの方法を利用するにも限界がある。ここに提示された仮説の多くは実際に行うこととは一致しないかもしれない。しかし、大多数の情報提供者が提供してくれた言説は理想を成すものであり、この理想を全員が共有し、彼らの考え方、信じ方、感じ方、意志の決め方に影響を及ぼす理想である。たとえ矛盾していたとしても、それにもかかわらずこれら

の仮説は非常に妥当なものであると認められている。これらの仮説は、親族をそして非親族を支える規範として機能している。

仮説

Ⅰ．個人の最も重要な義務と責任は、父や母、きょうだい、親戚といった近接した親族に対して存在する。

推論１　子どもは十分な年齢に達するや家族を助けるように期待される。

推論２　子どもに対する親の権威は、親が生存し健全である限り広がり続け少なからぬ重要性を持ち続ける。親がいなかったり健全でない場合は長子がその責任を負う。

推論３　長男あるいは長女が代理親の役割を果たす場合は、長男／長女は他の子ども達に対する権威を持つ。

推論４　子どもは家族に不名誉をもたらすことをしてはならない。子どもは経済的・社会的地位のために奮闘しなければならない。これは子どもの功績が親の地位を高めるからである。

推論５　親が子どもを躾ることができることを社会的に証明するのに必要なものとして、理想として子どもたちの仲のよさがある。これが地域の尊敬に値する。

Ⅱ．拡大親族集団のすべての成員は自己に対して平等に関係付けられる。彼らの権利と義務に応じた期待は、可能ならば平等に分配されることが望ましい。

推論１　個人は、たとえ実際の活動において選択肢があったとしても、親戚のどちらかの組（例えば、母側のあるいは父側の親戚）との関係の親密さに区別をしてはならない。

推論２　親族の結び付きは、儀式による親族を除けば、他のどの種の関係にも優先するべきである。

推論３　援助は、それを知らせるために、他者へよりも前にまず親族に与えるべきである。

推論 4　遠く離れた土地へ旅行する時は、他の集団に加わる前にまず親族を探すべきである。

推論 5　親族への援助を断ることは集団関係の道徳基準に対する罪である。これは、親に対する侮辱であり、親族集団全体にとっての不名誉のしるしである。どうしても断らなければならないとしても、それは物質的・社会的・道徳的見地から妥当でなければならない。

Ⅲ．年齢は知恵と経験と同等に見なされる。

推論 1　集団内のあらゆる年少者は年長の成員を尊敬しなければならない。

推論 2　社会的な集まりにおいては年長者には耳を傾けなければならないし権威を認めなければならない。

推論 3　年齢は経験という知恵を持っている。若者は未熟で衝動的に行動し、無知で軽率である。

推論 4　若者の判断は正しいかもしれないが賢明であることはめったにない。

推論 5　年齢は知恵であるが、それは伝統と慣習の威厳と知識に結び付いていなければならない。

推論 6　超自然的制裁は年齢の知恵を擁護する。高齢者の呪いの言葉が、超自然的力が相応しい罰を課することを促進させるのである。

Ⅳ．助け合いは、人間と超人間的存在の間に作用を及ぼす理論上容認されたおきてであると認められている。

推論 1　すべての個人は自分の恩義を認めるべきである。人は、自分がどこから来たのかを振り返ることを知らなければらない（*marunong o matutong lumingon sa pinanggalingan*）。

推論 2　報酬と罰はその人が生存している間に与えられるかもしれないが、あの世（*sa kabilang buhay*）でも逃れられない。

推論３　究極の敬虔さは、命を授け、育ててくれた親への恩義を子どもがいかに返すかである。功徳を積んだ親は献身的な子どもを持つ。

推論４　恩義（*utang-na-loob*）は物質的な関係で返すことはできない。恩義は生きている限りその人物に留まる。

Ⅴ．話し方や考え方、行動における慎み深さは高く評価される。

推論１　個人は、愛情であっても怒りであっても感情を公に表わすべきではない。

推論２　ある人物の真の感情を暴くことは、その人を他者による悪意のある利用をされ易くし、問題をもたらし得る。これは、そうした行動が他の人物の感情を傷つけることがあるからである。

推論３　個人間の関係にとって最もよい方策は、追い詰められるまでは否定的な感情を表さないことである。いつでも好意的な態度を見せることは人々にその人物の誠実さを疑わせることになる。

推論４　肉体は徳の砦である。公衆の目から遠ざからなければならない。ふしだらな者だけが公衆の面前に身を曝す。

Ⅵ．誠実、勇気、忠誠心、控えめ、丁寧さが、個人が到達し持ち続けるよう奮起するべき最高の目標である。

推論１　不誠実と不忠はやめさせなければならない。こうした態度は個人だけではなく家族の道徳的立場をも反映しているからである。

推論２　男は男としてあらねばならぬ。他者が男としての名誉を攻撃するのを許してはならない。

推論３　真の男は名誉のためには死をいとわない。

推論４　いったん言葉にしたら、命を賭けてそれを守らなければならない。

推論５　友人や目上の者、教師、雇用主、村の仲間への忠誠は持ち続け

なければならない。

Ⅶ. 体面と名誉はどんな犠牲を払っても保たれなければならない。

推論１　人は自尊心を持ち続けることにより自分自身に威厳をつけるべきである。

推論２　よい女とは結婚するまで純潔を守り、名誉のためには死をもいとわない者である。

推論３　いったん結婚したら、女は一点の曇りもない忠誠心を持って夫を尊重すべきである。

推論４　女は女らしく振舞うべきである。その役割は夫の配偶者としての役割である。

推論５　結婚した女性の家はその人格の反映である。女性は家庭での女性の特質を反映させるよう努めることによって女らしさに威厳をつけるようにすべきである。

推論６　夫は家庭でも仕事においてもパートナーとして妻の役割を認めている。夫は妻の判断なしに物事を決めてはならない。

Ⅷ. 習慣的で伝統的な慣行は熱心に守り、厳密に続けなければならない。

推論１　伝統的な慣行の中断は家族全体への超自然的存在の呪いをもたらす。したがって罪を犯した者には終生不幸が続く。

推論２　習慣的で伝統的なものへの意図的な軽視は親の権威と統制への公然たる挑戦である。したがってその行動はただちに厳しくとがめられなければならない。

推論３　習慣と伝統は保護と自信を与えてくれる。この変更は苦難をもたらす。

Ⅸ. 宗教は繁栄した生活への鍵である。

推論１　神は人間の全能の支配者である。人間の運命は神の掌中にある。

推論 2　この世で最も苦しみを受けた者には天国でのよい生活が約束されている。

推論 3　宗教上の義務は厳密に行わなければならない。これが永遠の幸福へ通ずる道である。

推論 4　教会の教えは守らなければならず、疑いを持ってはならない。

推論 5　世の中は邪悪で、正義への道は困難である。しかし信仰の厚い者は正しく導かれ平安と幸福に至る。

まとめ

ここにあげたフィリピン人の生活様式に関する 9 つの基本的な仮説あるいは基本原理は、国中の様々な民族集団出身の情報提供者が信奉したり観察したりして共有している基本的な信仰に基づいている。これらの仮説に基づけば、フィリピン人の社会組織についての一般化を妥当なものにすることができる。また、民族の差異について通例の固定観念の底に深く入り込んでいけば、フィリピン人としての文化の類型により多くの類似を見出すと主張しても差し支えない。

* これは Jocano, F. Landa 1998. “Anthropology of the Filipino People Ⅲ: *FILIPINO SOCIAL ORGANIZATION Traditional Kinship and Family Organization*”, PUNLAD Research House Inc. Metro Manila, Philippines の ‘Part Ⅲ Conclusions’ の日本語訳である。本文は英文で書かれたものであり、文中にタガログ語をはじめとするフィリピン諸語も使用されているが、英語以外のこれらの語句には文脈から意味がわかる場合以外は日本語訳を付した。